

徒然草『序段（つれづれなるままに）』定期テスト対策問題 | 現代語訳・係り結び・文学史の頻出設問と解答 解答・解説

問1 「することもなく退屈なのにまかせて。」「手持ちぶさたな（所在ない）気持ちのままに。」

※「つれづれ」＝することがなく退屈なさま・所在なさ。「なるままに」で「～であるのに任せて／～のままに」となります。

問2 することがなく退屈で、手持ちぶさたなさま。何もすることがなくて、もの寂しく所在ない気持ち。

※「つれづれ」は「退屈・所在なさ」を表す語で、しみりとしたもの寂しさのニュアンスも含む。書名の由来にもなった、序段の最重要語です。

問3 品詞＝形容動詞（ナリ活用）／基本形＝「つれづれなり」／活用形＝連体形。

※「つれづれなり」は一語で「することもなく退屈だ」という意味の形容動詞です。下の「ままに」へ続くので連体形「つれづれなる」になっています。なお、「つれづれ（名詞）＋断定の助動詞『なり』」と分けてとらえる説もあります。

問4 格助詞「に」を含む連語「ままに」で、「～のに任せて・～のままに」という意味を表します。

※「ままに」は「成り行きにまかせて」「～するとすぐに」などの意味をもつ語。ここでは「退屈なのにまかせて（＝退屈をまぎらすように）」と訳します。

問5 「一日中、硯（すずり）に向かつて。」

※「日暮らし」＝朝から晩まで・一日中。「向かひて」は「向かふ」の連用形＋接続助詞「て」です。

問6 「日暮らし」＝朝から晩まで・一日中（終日）。

※「暮らし」は「（一日を）暮らす」から来た言い方で、「ひぐらし」と読みます。虫の「ヒグラシ（蝸）」とは別の語です。

問7 「硯」の読み…すずり。

※墨をする道具のこと。文章を書く道具に向かう、という場面です。

問8 「心に次々と浮かんでくるとりとめのないことを、これというあてもなく書きつけていると。」

※「書きつくれば」の「ば」は已然形＋「ば」で順接の確定条件（～すると／～していると）。原因・きっかけを表します。

問9 意味…（心に）次々に浮かんでくる。移り変わっていく。

品詞分解…うつり（ラ行四段動詞「うつる」連用形）／ゆく（カ行四段動詞「ゆく」連体形）。

※「うつりゆく」で「次から次へと現れては移り変わっていく」の意。ここでの「うつる」は、心に思いが次々と現れる意味で、現代語の「（病気が）うつる」「（席を）移る」とは意味が違う点に注意します。

問10 意味…とりとめのないこと。つまらない・取るに足りないこと。

語構成…「よしなし」＝「由（よし）」＋「なし」で、「筋道・理由・由緒（よし）がない」という成り立ち。そ

れに「ごと（事）」が付いて「よしなしごと」となります。

※「由（よし）」は「わけ・理由・由緒」の意。

問11 「そこはかたなく」＝これというあてもなく。とりとめもなく。なんとなく。

※「そこはかたなし」＝「そこ（其処）」「は」「かた」も無い、すなわち「どこと（はっきり）特定できない」が原義です。

問12 「ば」は已然形（「書きつく」の已然形「書きつくれ」）に接続し、順接の確定条件（～すると／～していると／～ので）を表します。

※未然形＋「ば」（順接の仮定条件「～なら」）との違いに注意。ここは「書きつけていると（その結果）」という意味です。

問13 「(自分でも) 妙に、気が変になりそうな心地がすることだ。」

※「あやしう（＝あやしく）」＝妙に・不思議に。「こそ～けれ」の強調を訳に出すと「(実に) 妙に正気を失いそうなほどである」となります。

問14 係助詞「こそ」を受けて、文末が已然形「けれ」で結ばれている（「こそー已然形」の係り結び）。これにより意味が強調されています。

※「こそ」が無ければ終止形「ものぐるほし」となるところを、「こそ」に呼応して已然形で結んでいます。

問15 ものぐるほしけれ＝ものぐるほしけれ（形容詞「ものぐるほし」の已然形）。活用の種類＝シク活用／活用形＝已然形。

※「ものぐるほし」はシク活用の形容詞。その已然形が「ものぐるほしけれ」で、係助詞「こそ」の結びになっています。

問16 「ものぐるほし」＝気が変になりそうだ。正気を失いそうなほどだ。狂おしいほどだ。

※「もの」は「なんとなく・どことなく」の意を添える接頭語。次々と書きつけているうちに、自分でも妙な気分になってくる、という心情を表します。

問17 もとの形…「あやしく」（形容詞「あやし」の連用形）。変化の名前…ウ音便。意味…妙に・不思議に。

※「あやしく」→「あやしう」とク→ウに変わるのがウ音便です。「あやしうこそ」で「妙に（～なことよ）」と、下の強調へつながります。

問18 （例）「することもなく手持ちぶさたなのにかかせて、一日中、硯（すずり）に向かって、心に次々と浮かんでは消えていくとりとめのないことを、これというあてもなく書きつけていると、(自分でも) 妙に、気が変になりそうな心地がすることだ。」

※短い一文ですが、序段として「徒然草を書く動機」を述べた有名な箇所です。一語ずつていねいに訳しましょう。

問19 作者は、することもなく退屈なのにまかせて、一日中、硯に向かい、心に次々と浮かんでくるとりとめのないことを、あてもなく書きつけている。すると自分でも妙に正気を失いそうな（不思議な）心地がする、と述

べています。

※「徒然草」という随筆を書きつづっていく、その動機・きっかけを語った序章にあたる部分です。

問20 書き出しの「つれづれなるままに」の「つれづれ」(=することもなく退屈なさま)から取って『徒然草』と名づけられたと考えられます。

※「徒然」を音読みすると「とぜん」ですが、書名としては訓で「つれづれ(ぐさ)」と読みます。冒頭の語が書名になっている点が問われやすいところです。

問21 作者…兼好法師(吉田兼好/卜部兼好)。ジャンル…随筆。

「随筆」とは…見聞・体験・感想などを、筆の進むままに自由につづった文章のこと。

※兼好は出家した人物なので「兼好法師」と呼ばれます。

問22 成立時代…鎌倉時代(末期)(14世紀前半ごろ)。総称…清少納言『枕草子』・鴨長明『方丈記』・兼好法師『徒然草』を合わせて「(日本の)三大随筆」といいます。

※成立順は『枕草子』(平安中期)→『方丈記』(鎌倉前期)→『徒然草』(鎌倉末期)。『徒然草』が三つの中で最も新しい作品です。